

1. 「シルクロード、悠久の歴史と人との出逢い」 — 玄奘三蔵の足跡を中心として —

サイクリスト、シルクロード雑学大学主宰 長澤 法隆

砂漠とオアシスを巡り天山山脈を越えるシルクロードの脚力の旅。1993年から2012年までの20年をかけて自転車で西安からローマまで見聞しましたが、今回は西安からサマルカンドまで、オアシス、砂漠、天山山脈…と、走馬灯のように写真で紹介します。また、玄奘三蔵の足跡や戦後の、シベリヤ抑留者の活躍の様子等、日本人の痕跡を求めた旅でどんな風景が見えたのか、お伝えします。

2. 「沢登りの地平を拓くもの」 — 未知への探求、探検的沢登りの勧め —

渓谷探検家 成瀬 陽一

日本の渓谷は素晴らしい。その最たるものとして称名川を紹介したい。落差 320m という日本最大の称名滝、その落口から 2km 続く称名廊下の大峡谷地帯。日本に最後に残された地図上の空白地帯だ。海外では韓国、台湾はもとより、中国（福建省、雲南省、四川省）、ニューギニア、タスマニア島、カウアイ島、そしてレユニオン島へと沢登りを続けてきた。今、沢登りの地平線がうっすら見えてきたような気がしている。その辺りの様子を、写真や動画を交え報告させていただきたい。世界の渓谷は可能性に満ちていると感じている。

3. 「モンゴル国 西部のカザフ人」 — 鮮やかな装飾に囲まれた日常生活 —

千葉大学大学院人文社会科学研究所博士前期課程 廣田 千恵子

本発表は、モンゴル国最西端にあるバヤン・ウルギー県に居住するカザフ人の日常生活、及び装飾利用文化に関するものである。バヤン・ウルギー県のカザフ人の多くは、牧畜を営み生活している。ウイと呼ばれる伝統的ユルタの内部は、女性の手芸によって作られた色鮮やかな装飾で溢れている。カザフ人には、自分の子が結婚した際、家財道具に装飾を施し贈る習慣がある。近年は、それらの装飾を観光客に売り、経済的にも利用している。

4. 「日本人とチベット」 — 河口慧海のチベット旅行を中心として —

高野山大学文学部 奥山 直司

日本人がチベットと関わりを持ちはじめたのは、日本が近代化の道を歩みはじめてからのことである。明治 20 年代（1887 年～）から、日本仏教界には「入蔵熱」（チベット入国熱）が起こり、何人もの青年僧がチベットを目指した。その中で最初にチベットの都ラサに到達したのは黄檗僧 河口慧海（1866—1945）であった。本講演では、慧海の足跡を日本からヒマラヤ・チベットへとたどりながら、日蔵関係の原点ともいべき彼の探検行に秘められた夢と志について考えてゆく。

5. 「比較認知科学からみた文化の進化的起源」

国際霊長類学会長、日本学術会議会員、京都大学霊長類研究所、AACK 松沢 哲郎

人間の体と同様に、その心も進化の産物です。文化も教育も親子関係も進化の産物です。しかし骨や歯は化石として残りますが、心や文化は残りません。そこで、約500万年前に人間との共通祖先をもつチンパンジーを研究対象にしました。チンパンジーの心や文化がわかれば、人間の心や文化の歴史がわかるでしょう。アフリカの野外研究と日本の実験研究を並行して進めてきました。石器など道具を使う文化がチンパンジーにもあり、「教えない教育・見習う学習」によって世代を超えて受け継がれることがわかりました。進化の隣人チンパンジーからみた、人間の文化の進化的起源についてお話します。